



CONTENTS

活動報告 SUAC Report

- 「国・民族・企業・団体、人々の心」をつなげる
崔学松 / 国際文化学科 2
- SUAC & SPAC 連携事業
梅若猶彦 / 芸術文化学科 3
- SUAC巡回展「工芸継承 東北展、日本インダストリアルデザインの原点と現在」
永山 広樹 / デザイン学科 4
- UDウィーク～「多様な人の可能性を尊重し活かすデザイン」を考える～
小浜朋子 / デザイン学科 5
- 絵本とAI
かわこうせい / デザイン学科 6
- 平成30年度後期公開講座「イブニングレクチャー」
7
- 開催報告
平成30年度 静岡文化芸術大学×浜松市楽器博物館 イベント 8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●https://www.suac.ac.jp/

A r t & C u l t u r e



文化政策学部長

森 俊太

Shunta Mori

文明観光学コース 今春開講

4月から文化政策学部に「文明観光学コース」が、デザイン学部に「匠領域」が開講されます。この巻頭言では、文明観光学コース設置の背景と目的、カリキュラムの特色などを紹介します。

今日、観光について考えてみると、静岡県はもちろんのこと国全体でも、外国人観光客の増加、日本人の観光の多様化、伝統的観光地の再生への期待などの課題が山積しています。これらの課題には、従来の観光政策の発想では対応できないことが多く、より創造的な解決策が必要とされています。つまり、観光という行為や現象を国内外の歴史を踏まえて根本から見直し、新時代の観光の可能性を前例にとらわれず大胆に探る視点が求められています。

本学では、そのような視点を「文明観光学」と名づけ、文化政策学部に文明観光学コースを設置することにしました。本コースでは、自然環境と人間の間を見直し共生を促す観光プランの開発、地域の歴史や文化に根ざした観光資源の発掘、そして多様な価値観・世界観に基づく文化・芸術を通して相互理解を深めるツアーの企画立案などができる人材の育成を目指します。

本コースは、文化政策学部を構成する国際文化、文化政策、芸術文化の3学科を「横断」する構成となっています。つまり、どの学科に入学した学生でも、必修科目の履修などの条件を満たし、所定のゼミ選択の手続きを経ることにより、本コース専任教員のゼミに登録することができます。そして文明観光学に関する卒業研究を行うなどコース修了の要件を満たせば、卒業時に所属学科の卒業資格を得るとともに、文明観光学コース修了の証明書も取得できます。

本コースの主な科目としては、「文明と観光」「ユーラシア文明論」「観光学概論」「観光社会学」「グローバル観光論」「観光地理学」「観光ビジネス論」などがあります。その他に観光現場での実習科目が必修となっています。また、学生はコースの科目を履修しつつ、「本籍」である所属学科の科目も履修します。つまり、国際文化+文明観光、文化政策+文明観光、芸術

文化+文明観光という、3つの「ハイブリッド」領域ができるわけです。

国際文化学科の学生が文明観光学コースに登録した場合は、「多文化とエスニシティ」と「文化交流論」の2科目が必修となり、さらに学科の「日本文化史」「英語上級観光英語」他の選択科目群などから科目を選びます。例えば、日本の歴史、宗教、文学について専門的知識を習得した学生には、外国人観光客に日本文化についての深い理解と感動を与える企画を担うプランナー職が考えられます。また、複数の外国語を学び、東アジア地域の社会と文化を比較研究した学生には、この地域の人々の相互理解を促進する案内と説明ができる専門ガイドというキャリアが期待できるでしょう。

文化政策学科の学生は、「産業遺産と産業史」と「地域観光論」が必修となり、さらに「広報・広告論」「マーケティング論」他の選択科目群などから科目を選びます。例えば、静岡県内の名所・旧跡や温泉など従来の観光地の現状と課題についての実証的な調査研究をした学生は、地方公務員として地域観光の広報戦略の企画立案や、産業遺産の観光事業化などを担当する人材候補となるでしょう。

芸術文化学科の学生は、「文化財保護政策」と「文化施設の実践と運営」が必修となり、さらに学科の「音楽史I」「美術史(日本・東洋)I」他の選択科目群などから科目を選びます。この学科の学生が文明観光学を学んだ成果としては、アートマネジメントの知識を活かした、音楽、美術、演劇など芸術文化活動の観光資源化を担うキャリア形成が期待できます。

ちなみに、文明観光学コースの選択科目には、同時期に設置されるデザイン学部の「匠領域」に開講される「日本伝統建築」と「テキスタイル概論」も含まれます。文明観光学と伝統工芸を現代に活かす匠領域の理念には、共通する部分が多いため、これらの2科目を組み入れました。デザイン・匠と文明・観光の各分野は親和性が高く、今後も相互に影響しあいながらの発展が期待できます。

なお、4月には、静岡県立大学の経営情報学部で観光マネジメントのプログラムが開設されるため、県立大と本学による共同のスタートアップイベントも計画中です。

観光の本質は文明であると思います。つまり、観光とは、人が自分の日常生活とは異なる自然環境や文化を訪れ、美しいものや珍しいものを五感で体験して感動したり、多様な価値観や世界観を知り、その豊かさに感銘を受けたり学んだりする行為です。そして、そのような多種多様な自然環境と人間の関係、文化のあり方とは、まさに文明を作り上げる要素でしょう。

文明と観光を組み合わせた教育プログラムは、世界で唯一であると思います。つまり、このコースは画期的、創造的であり、野心的でもあります。いよいよ今春始まる文明観光学コースを担う関係者の一人として、重い責任を感じると同時に、やりがいも感じています。

「国・民族、企業・団体、人々の心」をつなげる

崔 学松 (国際文化学科)

2014年に着任後、「様々な国・民族、企業・団体、人々の心をつなげる」ことを大事にしながら、行政と企業の専門家とともに、グローバル化と地域活性化の狭間で、行政ができること、企業ができること、個人ができることを、広く深く考える力を鍛えるための試行錯誤を重ねてきた。

①日中友好大学生訪中団

青少年交流は日中両国の善隣友好の絆をより強いものにしていく上で大変意義深く、日中関係を支える基礎でもある。日本中国友好協会は、中国政府の要請を受け、日本の大学生を中国へ派遣している。



日本の大学生が中国の大学生と直接交流し相互理解を深め、今や世界の縮図ともいえる中国の生活文化や社会に直接触れ、より客観的に中国を理解することを目的としている。国際航空運賃、中国滞在費など参加諸費用すべてを中国側が負担し、中国滞在中には大学訪問、大学生との交流、名所旧跡の参観等をしている。2016年より、毎年本学両学部からは5~10名の学生が厳しい書類審査を勝ち抜いて参加しており、参加者数が増え、最も多い大学の一つとなっている。

②大学生による知的財産活用ビジネスアイデアプレゼン大会

大会の目的は、産学官の地域支援機関が連携した大学生による大手企業の開放特許を活用した斬新な商品アイデアの創出、及びアイデアの商品化の実現と事業化による中小企業と地域の活性化の促進である。2017年度と2018年度、本学両学部より編成されたチームが2年連続、優秀賞(準優勝)を受賞した。大会を通じて、いま社会が最も求めるコミュニケーション能力、所謂チームワークとチームマネジメント能力を鍛え、強い意志と自負心を持って広い視野で各自関心分野を深く掘り下げながら、自分が持っているものを最大限発揮できる貴重な経験を積み重ねてきた。



③全日本中国語スピーチコンテストと中国語圏への海外研修

本学と東海地域における中国語学習の普及と質の向上を目指し、相互理解と友情を深めることを目的とし、日中友好協会主催の全日本中国語スピーチコンテスト県大会を2016年から3年連続SUACで実施した。日中の相互対話を考えた場合、二つの言語の持つロジカルな面と歴史的な文化背景の違いを身につけることを通じて、多様性に基づいた中国地域社会の可能性を探求することが大切である。そのために、中国語教育においては教室内の文献講読をもとにした演習と、中国語圏への語学研修や実地のフィールドワークとを結びつけた形態の取り組みをしている。例えば、サマープログラムとして台湾語学研修な

どへの参加を通じて、参加者は国境や言語の垣根を越えたグループでの共同作業を通し、異文化交流や仲間とのコミュニケーション、その表現方法のテクニックを学ぶ。参加者は、中国語の初級と中級クラスに分かれて中国語を学び、日々の活動や寮生活でそれらを実践的に活用することができる。その他にも、企業の参観、民俗村の探訪、博物館の見学、文化交流イベントなどのフィールドトリップも含めてプログラムが構成されている。



④大学祭

毎年、碧風祭では「手作り・やみつき水餃子」や「海鮮チヂミ」の製造販売に取り組むなど、日頃より学部・学科・学年の垣根を越えた食文化交流などを通じて、中国や韓国からの留学生、社会人聴講生、地域社会との交流と親睦を心がけている。

⑤国際文化演習

「グローバルリズムとリージョナリズムの狭間で信頼醸成やウィンウィン関係構築に何が必要か」という今日の問題に対し、政治・経済・環境・社会・文化・歴史など様々な視点から、中国語圏の関連論文を読み解き、自分の関心の研究テーマを結び付けて答える形で、広い視野で深く掘り下げている。卒業研究は、最終的に『卒業研究記念論文集』として印刷製本し、ゼミ生らに一冊ずつ寄贈している。また、定期的に行政・企業の専門家や卒業生を招き、いま行政・企業など社会が求める人材像や仕事とは何か、自分らしい就活とは何か等について、最新情報や専門家の豊富な実務経験に基づいた社会・業界分析を行い、国・県などの就活サポートシステムへの登録・無料活用方法を習得しながら、就活へ向けて大事な一歩を踏み出す場となっている。



私がこれまで研究対象としてきたマイノリティ社会は、グローバル化した社会に生きる私たちに、国家ありきを越えるような新しい視点、柔軟な発想をいかに持つべきかのヒントを与えてくれた。自分の根っこは守りつつも、他者を柔軟に受け入れ共生の道を探る生き方である。私が世界に関心を持ち始めた中学時代、欧米の若者が日本アニメに熱中し、日本の若者がK-POPを楽しみ、中国の若者がユニクロの服を着る時代が来るなど誰が予想できなかっただろう。東アジア国際関係が円滑でない今日こそ、中国や韓国など周辺地域と積極的にかかわりながらグローバル化の時代に遅く生きる知恵が求められているのではないかと思う。今後とも多民族・多文化共生をキーワードに、様々な国・民族、企業・団体、人々の心をつなげる活動を通じて進めていきたい。

活動報告 SUAC Report


SUAC & SPAC 連携事業
SHIZUOKA PERFORMING ARTS CENTER
スペースP=静岡県舞台芸術センター

梅若 猶彦 (芸術文化学科)

本学と静岡県舞台芸術センター（以下SPAC）の連携事業は2014年から始まった。SPACの宮城聡氏と筆者との間で話し合いがなされ、SUACは教育研究、一方のSPACは創造活動と、2者とも人間の普遍的価値の創造と向上を目指す組織体としての連携は双方の理解と協力で実現する事となった。

先ず実行委員会を設置し、機能目的として、企画の原案の承認、連携の具体化、企画運営、毎年の事後の報告、定期的な更新を行うなどを考えた。過去5年間の開催は本学で行われ、それ以外の打ち合わせ会議等はSPACで行うなど、分散している。将来的に打ち合わせ会議等の頻度によっては、移動時間の短縮を配慮したskype meetingやFacetime、さらに、よりプロフェッショナル向けのOnline会議の活用も必然的な事として取り入れなければならないだろう。

現在の委員構成は、顧問：横山俊夫、委員長：宮城聡、副委員長：梅若猶彦、委員：宇佐美稔、高田和文、立入正之、高林利衣、オブザーバー：井上由里子、大学事務局職員らが中心となって議論している。

連携事業は多角的意義を有するが学生への教育面を例にとると、本学芸術文化学科科目「芸術表現B」の目的「第一線で活躍する芸術家のもとで、その高度で専門的な芸術表現の本質を体感する。」と符合する。

既にSPACとの現代劇は5年間で5公演、インターンシップは毎年数回SPACにて実施されており、これらは地域連携実践演習コースとしても履修できる。本学学生を対象としたSPACインターンシップには、公演のリハーサル見学、芸術局制作部の実務の見学と指導も含まれるなど、毎年新たなメニューが用意されている。現代劇公演に参加する学生は、演技に限定されることなく、照明音響、運営を問うていない。

第1回現代劇公演では、宮城聡演出の近代能楽集「綾の鼓」が上演され、そこに本学の学生2名が準主役級で参加した。

もともと現行曲の能「綾の鼓」は、観世流では能「戀重荷」（こいのおもに）と読み替えられる同一曲で、五流全て共有する名作である。三島は、能の様式を自分の文学に取り入れる事が不可能であるがゆえに、テーマのみを取り入れた、と言っていた（三島の英語のインタビューから）。宮城聡は岩吉と華子役をはじめ、他の役にも仮面を着用する演出を取り入れ、マダム役に関しては、生身の俳優の左右で人形を合体させ、それらは俳優の左右の手に対応していた。その1人6脚の姿は、人間と人形の結合双生児を思わせる一方で、岩吉と華子等を含む、マダム以外の役者のセリフは、能でいえば地謡に代行させ、役者の身体と声を舞台上で様式分離するなど結合と分離が、複雑に絡み合っていた。

●第1回連携事業 現代劇公演 (2014年10月)

現代劇上演：三島由紀夫 近代能楽集「綾の鼓」宮城聡 構成/演出

出演：岩吉、渡辺敬彦 (M) /吉見亮 (S)、加代子/女店員：星万莉子 (M)・山浦一紗 (S)、藤間春之輔：中野真希 (S)、金子：鈴木麻里 (S)、マダム：桜内結う、華子：大高浩一 (M) /石井萌水 (S) (M=ムーバー/S=スピーカー)

<SPACスタッフ>

演出助手：中野真希、舞台監督：村松厚志、舞台監督助手：佐藤聖、照明：樋口正幸、音響：加藤久直、衣装：駒井友美子・清千草、小道具製作：深沢襟・三輪香織、制作：高林利衣・佐伯風土

<SUAC スタッフ>

企画/発案：梅若猶彦、運営：新能プロジェクトチーム：加藤美穂・香原優・瀧下真也、宣伝美術：新能プロジェクトチームデザイン班、協力：p@tch code、舞台撮影：映像部、主催：静岡文化芸術大学、共催/製作：静岡県舞台芸術センターSPAC

●第2回連携事業 現代劇公演とシンポジウム (及びインターンシップ) (2015年11月)

・1部：現代劇「イタリアン レストラン」作/演出：梅若猶彦、出演：三島景太 (SPAC俳優) ほか
 ・2部：シンポジウム「伝統文化と現代芸術—仮面を手掛かりに—」

●第3回連携事業「東海道四谷怪談カフェ」(及びインターンシップ) (2016年10月)

●第4回連携事業 現代劇公演とシンポジウム (及びインターンシップ) (2017年10月)

・1部：現代劇公演「喫茶店」作/演出：梅若猶彦、出演：三島景太、片岡左知子、関根淳子、真嶋陽 (芸術文化学科)
 ・2部：シンポジウム「現代劇の時空の問題—表現者の立場から—」司会：立入正之、SPAC俳優3名、ゲスト登壇：高田和文

●第5回連携事業 パフォーマンスとシンポジウム (及びインターンシップ)

「シャーマニズム、トランス、亡魂、生霊、治癒—アジア文化圏における亡魂の表徴—」(2018年10月)

・1部：パフォーマンス「Entranced II」
 演出：アイダレッザ、演奏：エリック エヌカウア、出演：アイダレッザ、大内米治 (SPAC俳優)、館野百代 (SPAC俳優)
 ・2部：シンポジウム「シャーマニズム、トランス、亡魂、生霊、治癒—アジア文化圏における亡魂の表徴—」

発表者：モニカ アルカンターPh.D (ポロニャ大学)、ガレス リチャーズ (作家、編集者)、ハーディー シャフィーPh.D (サンマレーシア大学演劇学部学部長)、コメンテーター：高田和文 (イタリア演劇研究者)、司会：立入正之 (西洋絵画研究者)、通訳：梅若猶彦 (能楽師)、企画・発案：梅若猶彦

<スタッフ>

舞台監督：日下怜子、照明デザイン：東ちひろ (音響照明技術研究会サークルp@tch code)、照明セッティング：音響照明技術研究会サークルp@tch code、照明操作：大貫真悠子、選曲：アイダレッザ、音響操作：佐野菜子、演出班：日下怜子・安孫子みづき、運営スタッフ：鈴木まこ・稲葉彩花・棚瀬将史・種村公誠、記録撮影：安齋瑛梨、本学OG協力：長澤朋子・高林利衣 (SPAC)

放課後トーク：「放課後トーク~après la classe~」(2018年10月)

運営：安孫子みづき・安齋瑛梨・今西里奈、主催：本学井上研究室、協力：梅若猶彦



第2回連携事業チラシ



第5回連携事業チラシ

宮城聡氏が連携事業実現前に話された課題の一つに、本学の大学院生の論文の検証と応用があった。氏は本学のCultural Policy 及びArts Managementを修める院生の論文がSPACに対して何らかの形で貢献できるのではないかと、という事であると拝察した。目から鱗が落ちた思いであった。連携事業関連

で、未だにそのような論文が発表され、さらに採用されるまでには至っていないが、近未来に期待しつつこの報告を終えようと思う。最後になったが、SPACのみならず、本学卒業生の高林利衣氏のご高配に深く感謝したい。

SUAC巡回展

「工芸継承 東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

永山 広樹 (デザイン学科)

はじめに

本報は、2018年12月6日(木)から19日(水)の14日間、静岡文化芸術大学西ギャラリーを主な会場に開催された、巡回展「工芸継承 東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」について展示会に至る経緯と工芸継承について記します。

展示会は同名特別展として、国立民族学博物館(以下：みんぱく/大阪府吹田市)において2018年9月13日(木)～11月27日(火)の期間開催された展示会を本学文化・芸術研究センターとみんぱく主催による巡回展示です。

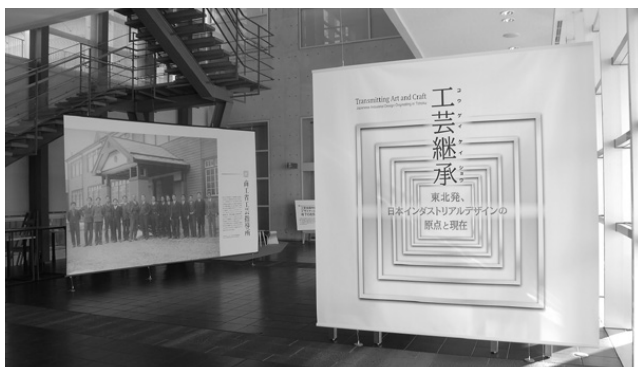
展示は、日本のインダストリアルデザインの原点である国立工芸指導所(以下：指導所)の活動に注目し、継承された伝統の技と洗練されるデザインの奥深さを紹介。培われた素晴らしいデザイン・技術力を次の世代への継承について考えるとして、開所から1967年改組までのデザイン試作品・資料展示と試作品を受け学生と工芸職人らがデザインした新たな試作品を紹介しました。

国立工芸指導所(後：産業工芸試験所)

1928年(昭和3年)に仙台市二十人町通(現：仙台市宮城野区五輪)に設置された国立の試験研究機関です。東北地方産業振興と日本製品輸出振興を目的に、新素材・技術開発、デザイン開発・評価等、試作試験研究を行いました。併せて、成果等を技術相談・伝習生事業・普及誌(工芸ニュース)発刊等事業を行い、技術指導・啓発を実施しました。戦前から終戦後までは、物資不足等の制約による試作・技術開発研究。1952年産業工芸試験所(以下：産工試)と改組され1967年(昭和42年)に産工試から東北支所が分離(この時産工試が廃止)して東北工業技術試験場(現：産業技術総合研究所東北センター/以下：東北センター)が発足されるまで各種事業を行い、日本全国への普及啓蒙を図りました。

デザイン試作・資料の移管

1967年産工試東北支所が改組された東北センターでは、産工試デザイン試作品・研究資料等の保存、展示を継続していました。2014年東北センター所長より東北歴史博物館(以下：東北歴博)へ資料移管の打診があり、2015年7月・9月の資料整理後2016年3月収蔵されました。資料整理は、宮城県内工芸職人・学芸員らと制作年代、品名や素材・仕上げ等の記録化です。この時「資料を学生やデザイン・工芸関係者らへ伝えたい」と声が揚がりました。本学の巡回展開催は、この資料整理から始まりました。



東北歴史博物館特別展からみんぱく特別展へ

東北歴博において2016年5月から文化庁助成事業が開始、2017年1月14日(土)から2月26日(日)の期間、特別展「工芸継承 現在から捉え直す国立工芸指導所」を開催しました。参加型展示として学芸員・教員、学生(高校生・大学生)と宮城県内工芸職人が集まり、展示企画・構成など展示への全般的な携わりです。展示構成は、「第1章 商工省工芸指導所：指導所試作品展示」「第2章 現代に活かす工芸：参加学生と工芸職人のワークショップからの新たな工芸品」「第3章 エピローグ コウゲイを継承する」の3章構成とし、特に第2章は、高校生・大学生と職人の視点から指導所試作品を捉え直す試みとして、新たにデザインした現在の工芸品です。この新たな工芸品が工芸継承を考える重要なポイントになりました。

展示期間中、みんぱく学芸員が閲覧後「是非この展示を大阪で」とみんぱく特別展の企画が生まれ開催となりました。展示は、東北歴博特別展の構成へ「プロローグ：明治の伝統工芸」明治の超絶技巧紹介として金工・漆芸の展示と「第3章 工芸資料を博物館で伝える」みんぱく所蔵「園コレクション」と金沢美術工芸大学所蔵「平成の百工比照」を加えた4章構成の展示です。

静岡文化芸術大学の工芸継承

2019年4月から匠領域の設置が予定されています。伝統建築・伝統工芸とデザインの融合を図る学びを特徴とした領域は、指導所の活動と類似性が見られます。指導所は、東北の江戸時代から続く伝統工芸産地の振興を目的の一つとして工芸に対し「新たな技術を導入して新たな工芸」の展開を行いました。新たな技術は、試作品・資料からデザインと読み取れます。つまり、伝統技法を活かし、デザイン=新たな生活提案を加えたモノづくりの実践です。展示会第2章の学生と職人が新たにデザインした工芸品と同様に、この実践は、匠領域の活動・学びと繋がります。

本学の工芸継承とは、「工芸を単なる技法と捉え継続することではなく、既存技法に新たな技術：デザインを付加し、生み出された様々な形態(モノ)やモノを縁として生み出されるコトにより、我々の生活をより豊かに導く人材育成を図ることです。

最後に、巡回展開催に多大なる協力をいただきました国立民族学博物館、静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター教員・職員及び学生スタッフの皆様にご感謝申し上げます。



活動報告 SUAC Report

UDウィーク～「多様な人の可能性を尊重し活かすデザイン」を考える～

小浜 朋子 (デザイン学科)

■背景

「年齢や性別、能力の如何にかかわらず、全ての人が利用できるようにモノや空間、サービスなどをデザインする」というUDの概念が日本に広がり始めてから20年余り、静岡県、静岡市、浜松市、本学では、積極的に政策・教育・研究に取り入れ、全ての人に思いやりのある社会を目指して推進してきた。さらに最近では、障害者差別解消法の施行、発達障害・LGBTを含む多様性への意識の高まり、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催、静岡県の観光活性化など、新たな時代に即した展開が求められている。UD先進県としてこれまで蓄積したナレッジやネットワークを基にしつつ、UDの専門家だけでなくSUACの学生・教職員や地域の方々と一緒に、今後のUDの展開について考える機会をもちたいという思いから、『UDウィーク』を企画した。

■内容

産官学でUDを推進する際の大学の役割を図1のように整理し、スポーツ、サウンド、生活、3つの



図1：大学におけるUD推進の役割

テーマを中心として、SUAC内に点在するUDに関連する研究や教育活動を集めてプログラムを構成した。具体的には「スポーツ」「サウンド」「食」「グラフィック」「移動」など7つのブースでデザインの作品や研究成果を展示し、説明員による説明と参考資料や体験を通して理解を深められるようにした。例えば、「アダプテッド・スポーツ」のサウンドテーブルテニスとボッチャが体験できるコートをつくり、浜松市内のプレーヤーを実際に招いて交流を行った(図2)。グッドマン博士の名言に「失われたものを数えるな、残っているものを最大限に活かせ」とあるように、豊かな発想を持ち、小さな工夫を積み重ねることで、誰もが楽しめるスポーツやゲームを創造することは、まさにこれからのUDに活きる大切な視点である。



図2：ボッチャの選手による実演

■効果

5日間の来場者数は約350名と想定したより少なかったが、見学に来た方との細やかなコミュニケーションを通してUDへの感度が相互に高められ、新たにネットワークを広げることができた。特筆すべきは、このイベントの見学を授業に取り入れ



図3：授業の一環として展示を見学

て、学習効果を高めたことである(図3)。「生活環境のバリアフリー」を受講する約140人の学生は、授業の一環として各ブースをまわり、コメントを記入し、後にそのコメントのフィードバックを共有した。学生からは、「一つの方向から問題に取り組むより、様々な視点から働きかけた方が多くの問題点が発見、解消できる。いろいろな分野の人が手を組むことでより多くのひらめき生まれるのではないか。」「実際に使ってみて、本当に役立つそうと感じたものとそうでないものがあった。こうやってたくさんのアイディアを出さないと本当に役立つものは生み出せないものだと感じた。」「私たちには使いやすい空間であったが、バリアのある人たちにとってはどうか気になった。」など、核心に触れるコメントが多数聞かれた。また、企業との共同研究として展示していたロボットにおいては、学生の意見が商品化を加速させた。UDの領域の広さや深さ、多様な見方があることに気づき、UD視点の発信が社会を動かすという体験をすることができ、学生にとってリアルな学びとなったと感じている。さらに、ブースの説明はJDP(自助具プロジェクト)の学生にお願いしたことで、学生と地域の人との交流が展開された。

■今後

反省点も多々ある。行政や企業の方が交流できるよう、講演会などの特別企画を平日の午後に集中させたが、教員や学生は時間の都合がつかない人が多く、懇親を深めるには盛り上がりに欠けた。また、コンテンツが膨大すぎて、展示物や説明資料などの準備が行き届かなかった。今後に向けて、それぞれの課題について改善案を考える必要があるが、「より多くの方にUDの取り組みを幅広く一望していただき、体験や交流を通して理解を深めあうこと」は大切であり、それを継続してこそUDの概念が生き続けると感じている。今回、授業やキャンパスツアーなど、あらかじめ確保された時間の中で目的意識をもって参加するスタイルが効果的だったことから、今後は、日常のUD活動の延長線上でコンテンツを整え、授業や学内外で計画されているUD関連のイベントと連動させる形で「時代とともに進化するUD」を体感し、理解を深められる場の提供ができればと考える。

絵本とAI

かわ こうせい (デザイン学科)

○英語圏の絵本における多様性

インド西部ギルの森には「ライガー」という生き物が生息している。ライガーはライオンとタイガー（トラ）の交配種で、ライオンの顔に薄いトラ縞の体をもつ珍しい動物だ。絵本『The Tigon and the Liger』に、このライガーを描いた。ギルの森には、ライオンとトラが共生している。物語中のライガーは、見た目や鳴き声が「ちがう」とライオンたちにいじめられ、トラたちからも仲間はずれにされる。

英語圏の子どもたちは、さまざまな人に囲まれて「ちがいで」を意識しながら成長する。おのずと絵本にも、多様な人種・民族・性・バックグラウンドの人々を描きこむことが求められる。私に関わったどの絵本でも、その制作プロセスにおいて多様性が強く意識されていた。サーカスの絵本『Feeding the Flying Fanellis』では、カラフルな肌の人々を描きわけ、世界中からやってきた団員を登場させた。『Issun Boshi』（一寸法師）では、西洋人の誤解をひとつひとつ解きほぐしながら日本文化を紹介した。最近出版された『An Unlikely Ballerina』では、足の不自由な少女がバレエを通して困難を克服し、世界的なバレリーナへと成長するアリシア・マルコワの物語を描いた（制作には、静岡文化芸術大学デザイン学部生が参加している）。イラストレーター、編集者、テキスト担当者、デザイナー等がチームで議論をかさね、繊細な配慮と調整をへて一冊の絵本をつくりあげる。そのプロセスには多大な時間とエネルギーが注がれる。

○絵本の動物

一方、お手軽に多様性の問題をクリアする手だてとして、よく描かれるのが動物だ。ねこの肌色に配慮したり、性別の違うシロクマをバランスよく登場させるように求められたりすることは、あまりない。そもそも動物は絵本を読んだり読み聞かせをする当事者ではないため、苦情を送ってきたりしない。結果、絵本の世界には動物たちがあふれている。人間社会のややこしい問題を持ち込まずにすむユートピアの住民として、動物たちは重宝されてきた。冒頭の絵本に描いたライガーは、そんな楽園の動物たちから「ちがいで」を理由に差別される。楽園だった動物絵本の世界においても、多様性の尊重とマイノリティへの配慮が必要になってきた。

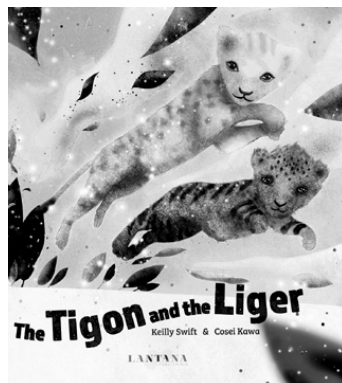
○絵本とアルゴリズム

ライガーを描くにあたっては、ほかの絵本にどんなライオンが登場するか、どんなトラが描かれているか調べておく必要があった。他の絵本作家が描く一寸法師やバレリーナも気になった。結果、日常的に絵本イラストレーションを収集・タグづけして分類するようになった。いつしか、データベースは何万点ものイラストレーションでパンパンに膨れ上がった。絵本イラストレーションを眺めて吟味するのは至福の時だが、世界中でどんどん生み出される素晴らしい絵本を分類し続けるには限界

がある。ネット通販で私の絵本を検索すると、アルゴリズムがオススメ絵本リストを下部に表示してくる。気になる絵本を思わず購入しそうになるが、まずは本屋さんで手にとって眺めてみたい。本屋さんまでの道はアルゴリズムが教えてくれる。方向音痴の私よりAIの方が数段うわ手だ。ならば、人力で分類してきた絵本イラストもアルゴリズムを使って分類できないか？そんな企てから本学の研究助成を受けて、絵本イラストレーションの余白解析と分類に関する研究をスタートさせた。浜松のIT企業（株）アスタワンの協力も得て、絵本イラストの余白をアルゴリズムに識別させたところ、ある程度の分類が可能であることを検証できた。余白における成果をベースに、絵本イラスト内のさまざまな対象をアルゴリズムに認識・分類させる研究へと歩を進めたい。

○絵本をつくるということ

ライガーの絵本を描く際には、私自身がリサーチを行い、資料を選別し、構想をふくらませて制作にあたった。しかし近い将来、アルゴリズムによって分類された資料をベースに、イラストレーターや絵本作家が、何をどう描くか判断するようになるかもしれない。私たちは、購買活動や道案内でAIに依存し始めている。代替されづらいと言われるクリエイティブな活動においても、人間が行ってきた判断を少しずつAIに任せるようになるだろう。ルネサンス以来、数百年間にわたって、私たち人間の下す判断こそが正しい、と考えられてきた。しかし今、人間の感性や理性を至高とみなすこの価値観がゆらいでいる。変化は、ライガーの絵本からも浮かび上がる。英語圏の絵本では多様性が強く意識されてきたが、動物絵本においてもマイノリティへの配慮がなされ始めた。自分とは違う性、自分とは違う姿形、自分とは違う言語、自分とは違う民族を大切にすること。さらに広げて、自分たちと違う生き物を尊重する生物多様性の観点は、人間を最優先する思考からの脱却につながる。人間の代わりにアルゴリズムがさまざまな判断をおこない、人間以外の生物が尊重される未来に生きるであろう子どもたちへ向けて、どのような絵本をつくるのか、誰（何）が絵本をつくるのか、模索してゆきたい。



『The Tigon and the Liger』
Cosei Kawa & Kelly Swift,
2017, Lantana (イギリス)

活動報告 SUAC Report

平成30年度後期公開講座「イブニングレクチャー」

(文化・芸術研究センター)

1. 第1回

- ・日時：2019 (H31) 年1月16日 (水) 18:30-20:20
- ・場所：静岡文化芸術大学 南 176大講義室
- ・講師：藤村龍至氏 (建築家/東京藝術大学准教授/RFA主宰)
- ・参加人数：150名
- ・タイトル：『ちのかたちとしての建築』
- ・概要：建築の設計に関わる発想についての視点と思考方法、並びに、集団でのアイデアの集約の方法論を中心に、アイデアの発想・思考方法・履歴の可視化から、集団での知の形成や集約についてまで、実際のデザインの形成プロセスを現したイメージ図や集団でのコンペティションの風景を映した写真を提示して説明をした。



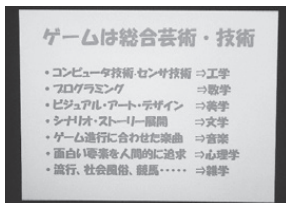
メーター/本学非常勤講師)

- ・参加人数：93名
- ・タイトル：『東映動画からハイジ、ピカチュウまでアニメの仕事振り返って』
- ・概要：日本のアニメーション史に名前を残す小田部氏が、アニメーションの世界に入った経緯から、数々の名作アニメーション制作の苦労談や制作秘話、及び、その後携わったゲーム業界での仕事について、対談形式で話された。アニメーションは、キャラクターの人間性や時代背景、生活環境など多面的に作りこんで絵と動きにより表現するもので、多くのスタッフの知恵や才能がひとつの作品に結実する。小田部氏のキャラクターデザインや原画など貴重な資料と共に解説した。



2. 第2回

- ・日時：2019 (H31) 年2月1日 (金) 18:30-20:30
- ・場所：静岡文化芸術大学 南 278大講義室
- ・講師：岩谷徹氏 (ゲームクリエイター/東京工芸大学教授)
- ・参加人数：52名
- ・タイトル：『メディア芸術としてのゲームとパックマン』
- ・概要：ゲームは「総合芸術」であり、様々な題材に拡張できるものである、という切り口から、ゲーム制作での思考方法や、実際の体験・取材を通じてモノづくりを考える視点などを講演され、ゲームを創るためには「人の心」を知ることが大切であると説明した。またゲーム制作に欠かせない「企画」・「プログラム」・「ビジュアル」に精通した人材を育成し、従来の「個人」が楽しむゲームから「社会」の役に立つゲームへ拡張すべきであると論じた。



4. 第4回

- ・日時：2019 (H31) 年2月7日 (木) 18:30-20:00
- ・場所：静岡文化芸術大学 南 176大講義室
- ・講師：永野大輔氏 (ソニー企業株式会社代表取締役社長/チーフブランディングオフィサー) × 中西哲生氏 (スポーツジャーナリスト/出雲観光大使)
- ・参加人数：77名
- ・タイトル：『ソニーはなぜ銀座に公園をつくったのか? ~新しいブランドコミュニケーションのかたち~』
- ・概要：ソニー企業の永野社長とソニー企業のイベントにも関わり永野社長と親交のあるスポーツジャーナリストの中西氏による、ビデオクリップやプレゼン資料の提示を多用したトーク対談形式にて、かつて銀座にありSONYの象徴であった「ソニービル」を解体して「公園」という空間を作り出したソニーのブランド戦略を解き明かす講座であった。一時期SONYブランドが低迷していたときに「銀座の庭」でありソニーブランドの発信拠点であったソニービルの解体を通じて、「減築」・「inviting (人が訪れる場所)」・「ソニーの“DNA”である“人のやらないことをやる”」ということをコンセプトに据えた「銀座ソニーパークプロジェクト」の誕生、及び、その“通過点”としての現在の銀座ソニーパーク、並びに、それによるSONYのブランドイメージの変化についてわかりやすく説明を行った。



3. 第3回

- ・日時：2019 (H31) 年2月5日 (火) 18:30-21:00
- ・場所：静岡文化芸術大学 南 278大講義室
- ・講師：小田部羊一氏 (アニメーター)
- ・聞き手：面高さやか氏 (アニメーター)



(文責：地域連携室 河西雅彦)

平成30年度 静岡文化芸術大学×浜松市楽器博物館

文化・芸術研究センター主催で2016年から学内で行なっている、コミュニケーションの場としての「ビチャラ会」での会話がきっかけで、本学両学部の教員が楽器博物館でのトークイベントに参加。2018年8月と11月に開催された楽器博物館での嶋館長との対談について。

<館長対談～この人に聴く～>

第1回 2018年8月4日(土) 14:00～

芸術文化学科 奥中康人 教授

テーマ:「ガーン!と仰天、浜松まつりのラップ」

まつりの法被姿で登壇、ご自身が撮られた浜松まつりの動画や画像を使って、この地域の楽器や音楽事情の関わり合いについて講演。後半は館長と、まつりと音楽談義。



第2回 2018年8月8日(水) 14:00～

芸術文化学科 梅田英春 教授

テーマ:「バリから学ぶ芸能の未来」

伝統芸能と言えども、単に保護活動をすれば良いというものではなく、むしろ過保護が芸能人も衰退させるという内容で講演。実際にガムランの生演奏も披露し、後半は館長との民族音楽談義。



第3回 2018年11月17日(土) 14:00～

デザイン学科 峯 郁郎 教授

テーマ:「人をつなぐデザインの力」

デザインとは何か?デザインの力が発揮されている事例を多角的に紹介しながら、楽器というデザインについて考察し、講演。静岡文化芸術大学には、文化政策に加えてデザインの学びがあることを改めて紹介。後半は館長と楽器の魅力について対談。



編集後記

3月に「文化と芸術」を刊行することができました。ひとえに執筆を快諾して頂いた教員の皆様へ御礼を申し上げます。

本年早々からインフルエンザの大流行と毎年恒例の花粉症に苦勞させられた方も多いかと存じます。健康のありがたみを感じながら、編集後記を執筆しています。

さて、私事ながら昨年9月より異動により、この「文化と芸術」の編集にあたることになり、慣れないこともありながらも、多くの方々のご協力の上に刊行できましたことは、感謝の気持ちもあり、やり遂げた達成感も感じております。

例年のことではありますが、3月・4月は大学の業務が多忙な時期であります。

無事に乗り切るためにも、まずは健康第一であり、業務上に支障を来さないように注意深くスピーディーに仕事をこなすことが大事であると自分自身に言い聞かせています。

また、「別れ・卒業」と「出会い・入学」の時期でもあります。本学を「卒業」される皆様の益々のご活躍を祈りつつ、新しく「入学」なさる方々とのご縁を大切に仕事に邁進したいものです。(K. M)

Art & Culture

文化と芸術

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.29

March 2019

発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)

